

社会的共通資本を語る一字沢先生が遺した「大切なもの」

内山 勝久

社会的共通資本は、提唱者である宇沢弘文先生言葉を借りれば、「ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持するような社会的装置」である。かつて先生が米国で研究されていた主流派経済学が、現実の問題に対して必ずしも十分な解決策を提示していないのではないかという疑問から始まり、日本に帰国以来約半世紀にわたり取り組んでこられたのが社会的共通資本研究である。そして、その研究拠点に選んだのが設備投資研究所（設研）であった。先生の理論的思考と設研の現場感覚とが上手く補完し合うことで多くの有意義な成果が生まれ、設研はこれらの成果を広く社会に発信してきた。

成果発信の一つの形として、9月25日の設研設立50周年記念シンポジウムにおいて、パネルディスカッション「持続的発展実現のための社会的共通資本」を開催した。社会的共通資本の考え方は経済学のほか環境学、都市政策・まちづくり、医療、教育などの専門家によって引用される機会も多いことから、これを日頃の研究等に取り入れている間宮陽介先生（京都大学名誉教授）、國則守生先生（法政大学）、岡部明子先生（千葉大学）、諸富徹先生（京都大学）、薄井充裕所長（設研）の経済学あるいは都市問題を専門とする5名をパネリストに迎え、「社会的共通資本について大いに語ろう」との基本方針の下に、活発な議論を展開していただいた。

パネルディスカッションの前半は、人口減少や財政制約の下で持続可能な発展を遂げるための社会的共通資本の果たすべき役割は何かという問題意識に基づき、各パネリストの専門分野から見た社会的共通資本の考え方や実践例を披露していただいた。後半は、直前に行われていた大西隆先生（日本学術会議会長）の特別講演「人口減少時代のまちづくり」を踏まえて、21世紀のあるべき都市像や、コンパクトシティの評価などについて議論した。市場経済は非市場があつてこそ安定的に存立し、市場と非市場の結節点に位置するのが社会的共通資本であること、日本のコンパクトシティは人口減少対策として推進されている点で背景が欧州と異なるが、中小都市の連係を意識している点では日欧の共通点が見出せること、その他、コミュニティの形成と機能の発揮、公と民の関係や新しい公共の考え方、各種の社会的共通資本のネットワーク構築と連係の重要性、地方の特徴的なまちづくり事例などの興味深い視点が幾つも提示された。

このパネルディスカッションが開催されたのは、宇沢先生逝去の報が公になるまさに前日であった。パネリスト一同、このような訃報に接することになるとは想像だにせず、議論の中では、宇沢先生に言及する場面が何度もあったことが印象深い。宇沢先生は晩年、社会的共通資本を言い換えて「人々にとって『大事なもの』、『大切なもの』」と表現することがあった。先生が遺したこの「大切なもの」をしっかりと守り、社会に広めていくことが、先生の教えを直接・間接に受けた人たちの責務であると痛切に感じている。合掌。

2014年10月27日